

第一章 研究の概要

1

21 世紀の社会情勢とそれを乗り越えるための資質と力

社会情勢は日々変化している。それもめまぐるしいスピードで変化している。マスメディアを通じて世界各国の情報は瞬時に伝達される。それは時空を超えて、疑似体験しているかのごとくである。世界は確実に接近し、互いに依存する度合いも高くなっている。経済やエネルギー援助など、世界は助け合っていないかなければならない反面、地域紛争はやむことがない。国を超えて相互に理解し合い、協力する体勢づくりは急務である。そのためには高度情報通信社会の基盤整理も、これからはさらに必要になってくる。世界規模での情報通信ネットワークを通じて、不特定多数のものが、双方向に情報を融合して思いを交換し、通じ合い、協力し合う。このような世界が21世紀の姿となるであろう。

では、未来を担う子どもたちの実際はどうか。激しく変動する社会情勢は、子どもたちにも少なからず影響を与えている。子どもたちは、偏差値教育のひずみのなかで他の者との競争をあおられている。生活の基盤である家族との団欒の機会も減少する傾向にある。さらには、地域社会のつながりの薄さが拍車をかけている。従来は、家族や他人とのかかわりの中で自然にはぐくまれてきた社会性や規範意識が、段々と希薄になってきていることは否めない。

このような社会情勢におかれている子どもたちに問われる資質や能力は何か。それは、21世紀の社会情勢に対応していける資質や能力のことである。

本学園には、大正13年に制定された3つの自伸会信条がある。

- ①「私たちは私たちの力で伸びていこう」
- ②「私たちは人のためにつくして感謝しよう」
- ③「私たちは私たちのきまりを尊重しよう」

①は子どもの自主性を育てる側面で自己実現をめざす子どもの姿、②は連帯性を育む側面で共感的理解を伴う自己尊重の気持ちを培う姿、③は自律性を育成する側面で学校や地域社会の一員であるという自己概念の形成をめざしている姿を表している。

この自伸会の教育理念は、まさに人間として普遍的に大切な資質であるといえよう。それは、大正時代から現在に至るまで本学園の教育理念として継承されてきていることが証明している。よって、本学園が大切にしてきたこの信条とこれからの国際的な視点を加味することで「どんな国・どんな時代に生きようとも人間として普遍的に大切な資質」を「ユニバーサルシティズンシップ」と位置づけ、21世紀初頭を生き抜く子どもたちに備えたい資質ととらえた。

そしてその資質をもとに、21世紀の社会情勢を乗り越えることができる力を「確かな語学力を基に、様々なメディアを駆使して多文化を理解したり、人々と国際的にコミュニケーションしたりする力」「21世紀初頭の社会の変化に対応することができる確かな学力」「広い視野に立ち、より直接的・体験的に他者や集団と豊かにかかわり合う力」と設定し、その力の育成こそが私たちの課題であるにとらえたのである。

2

研究開発課題（テーマ）と子どもたちにつけたい力

〈本学園の研究開発課題〉

幼小中一貫の教育力を生かした社会のグローバル化・高度情報化・超少子化の進展に対応する国際的コミュニケーション能力の育成を中心とした21世紀型学校カリキュラムの研究開発

この研究開発課題は、広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校において平成10年度より行ってきた幼小中一貫教育の理念に基づき、21世紀の様々な社会情勢の中で生きていく子どもたちにとってこれから必要とする学力は何かを明らかにし、その学力を確実に身につけるための幼小中段階での学校カリキュラムはどうあるべきかを研究しようとするものである。

さて、前項でも述べたように、21世紀に直面している課題を克服するためには次の3つの力の育成が急務であると考えている。

- ①「確かな語学力を基に、様々なメディアを駆使して多文化を理解したり、人々と国際的にコミュニケーションしたりする力」
＝「国際的コミュニケーション能力」
- ②「21世紀初頭の社会の変化に対応することができる確かな学力」
＝「21世紀型教科学力」
- ③「広い視野に立ち、より直接的・体験的に他者や集団と豊かにかかわり合う力」
＝「人間関係力」

これら3つの力は、本学園でとらえているユニバーサルシティズンシップをベースに21世紀初頭の課題を解決するために生きて働く力となるのである。

3 21世紀型学力

(1) 国際的コミュニケーション能力

21世紀のグローバル化・高度情報化の進展した社会において、そこに生きる人間が直面する課題を解決しながら生きていくための土台として考えられるのは「国際的コミュニケーション能力」である。

本学園では、国際的コミュニケーション能力を「確かな語学力を基に、様々なメディアを駆使して多文化を理解したり、人々と国際的にコミュニケーションしたりする能力」ととらえた。具体的には豊かな外国語会話能力や多文化理解の力、情報活用能力や情報の科学的理解や多角的判断力、メディア社会に参画する能力や態度などがあげられる。

(2) 21世紀型教科学力

子どもたちは、21世紀の社会情勢の中で起こる課題に直面したとき、それらを主体的に解決するために、どのような教科学力を必要とするのであろうか。

本学園では、「21世紀型教科学力」を「21世紀初頭の社会の変化に対応することができる確かな教科学力」ととらえた。そして、その内容を教科ごとに具体化することにした。また、私たちは、これらの教科学力を子どもたちが確実に身につけるために、幼少期から小学校低学年ごろに必要な基礎的な教科の力は何かを明らかにしようと考えた。

また、この21世紀型教科学力は、現在から将来にわたって必要と考えられる教科での学力をさすものであり、現在の学習指導要領などで示されているものを含めた時代が変わっても変わらない不易な学力という側面と、21世紀の新たな社会情勢の進展に対応するための新しい教科学力といった側面の2つを持つものである。そして私たちは、この2つの側面を持つ教科学力を明確に二分しているというわけではなく、各教科の基礎基本をベースに新しい教科学力が発展するというように、不易と流行の学力がお互いに支え合う関係であると位置づけている。

(3) 人間関係力

私たち人間は、常に他者とかかわりながら生きている。いつの時代においても「人と人とのかかわり」は、人間が社会の中で生きていく上で大切な要素であるといえるだろう。このことを本学園でも大切に考えており、平成10年度以降「人と人とのかかわり」をテーマに掲げて研究を進めてきたのである。また、本学園での長年の教育理念である自伸会の信条でも述べられている自主性・連帯性・自律性も、人と人とのかかわりに大きく結びつくものである。そして、特に21世紀のグローバル化・高度情報化・超少子化の

進展した社会においては、人と人との実際的なかかわりが一層大切にされなければならない。

そこで、私たちは21世紀型学力の3つ目として「人間関係力」を掲げた。そしてその意味を「広い視野にたち、より直接的・体験的に他者や集団と豊かにかかわり合う力」とし、具体的には広い視野に立ったものの見方や考え方を相互に学び合うこと、かかわりを生み出そうとする力や態度、自分の感情をコントロールしながら人間関係を調整していく力などを考えている。21世紀の人と人とのかかわりは、かかわる対象がより国際的になるであろうし、かかわる方法も高度情報社会においてより多様化するであろう。しかし、その中において私たちは、直接的な人と人とのふれあいを通して人間関係を深めることを大切にしようとしている。

4 本学園が構想する21世紀型学校カリキュラムの概要

(1) 21世紀型学校カリキュラムの全体像

本学園が構想する21世紀型学校カリキュラムの概要を図にしたものが、図1である。このカリキュラムは現行の学習指導要領には含まれない新領域として、領域「国際コミュニケーション」を設けたことの特徴がある。この新領域は、本学園が21世紀に必要な中心的な力であると考えた国際的コミュニケーション能力を子どもたちに育てるものであり、本学園のカリキュラムの中心をなすものである。そしてカリキュラム全体を、新領域「国際コミュニケーション」、「保育・教科学習」、「かかわり学習」の3つの柱で構成している。

このカリキュラムは、幼小中12年間のうち、前半の幼稚園年少～小学校3学年までの6年間を幼小連携の期間、後半の小学校第4学年～中学校第3学年までの6年間を小中連携の期間と設定している。

また、カリキュラムを2つの期に分けるにあたって、小学校第3学年と第4学年の間に区切りを入れたことも、このカリキュラムの特徴である。

		年少	年中	年長	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
国際 コミュニ ケーション	国際交流 学習	自国文化・人とのコミュニケーションを大切にした保育			多文化理解を中心とした学習			コミュニケーションスキルの向上を中心とした学習			コミュニケーションスキルを生かした多文化理解の学習		
	マルチ メディア学習	メディアに出会う保育			メディアに親しむ活動			メディアを具体的に活用する活動			情報の科学的な理解に基づくメディアの体験的活動		
保 育 ・ 教 学 科 習	〈学級担任制および体験学習を中心とした基礎的な学習〉				〈教科担任制による確実な学力向上をめざした発展的な学習〉								
	保 育 ○総合的な活動 ・言葉 ・環境 ・表現 ・健康 ・人間関係				国語科			国語科					
					発見科	社会科	社会科						
						理科	理科						
					算数科			算数科		数学科			
					表現科								
					音楽科			音楽科					
					図画工作科			図画工作科		美術科			
					体育科			体育科					
											家庭科		
						技術科							
						英語科							
						総合的な学習の時間							
か か わ り 学 習	道徳	道徳性の芽生え			道徳			道徳					
	特別活動				特別活動			特別活動					
	クラブ活動							クラブ活動					
	学校行事	学校行事（学園行事・自伸会活動）											

図1 本学園の21世紀型学校カリキュラムの全体像

表1 本学園の教育課程表

広島大学附属三原幼稚園 教育課程表（平成16年度）

年少児	1期	2期	3期	4期	合計	
	2	3	4	3	12	
年中児	5期	6期	7期	8期	合計	
	3	5	5	4	17	
年長児	9期	10期	11期	12期	13期	合計
	3	5	5	4	3	20

幼稚園においては、各期における主に国際的コミュニケーションの学習にかかわる活動が主となる日を日数として示したものである。幼稚園の活動は総合的に行われるもので、日常のなかで行われている活動は含まれない。

広島大学附属三原小学校 教育課程表（平成16年度）

	教 科											国 際 コミュニケーション		かかわり学習		合 計
	国語	社会	算数	理科	発見	表現	音楽	図工	体育	家庭	総合	国際 交流	マルチ メディア	道徳	特別 活動	
1年	255 (-17)		114		85 (-17)	46	50 (-18)	50 (-18)	80 (-10)		0	68		34	50	832 (+50)
2年	263 (-17)		155		88 (-17)	50	50 (-20)	50 (-20)	80 (-10)		0	70		35	51	892 (+52)
3年	218 (-17)	70	150	70		15	55	55	85		35 (-35→国際) (-35→特活)	70		35	70	928 (+18)
4年	218 (-17)	85	150	90			60	60	90		35 (-35→国際) (-35→特活)	70		35	70	963 (+18)
5年	163 (-17)	90	150	95			50	50	90	60	30 (-35→国際) (-45→特活)	70		35	80	963 (+18)
6年	160 (-15)	100	150	95			50	50	90	55	30 (-35→国際) (-45→特活)	70		35	80	965 (+20)

広島大学附属三原中学校 教育課程表（平成16年度）

	必 修 教 科											選 択 教 科	国 際 コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン		か かわ り 学 習		合 計
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健 体育	技術 家庭	英語	総合	国際 交流		マルチ メディア	道徳	特別 活動		
1年	120 (-20)	105	105	105	45	45	90	50 (-20)	105	35 (-65)	0	105		35	35	980	
2年	85 (-20)	105	105	105	35	35	90	55 (-15)	105	35 (-50)	50 (-20)	105		35	35	980	
3年	85 (-20)	85	105	80	35	35	90	30 (-5)	105	35 (-80)	120	105		35	35	980	

(2) カリキュラムの目標構造

カリキュラムを作成するにあたっては、5つのプロジェクト（国際交流学習開発部会・マルチメディア学習開発部会・幼小連携学習開発部会・小中連携学習開発部会・かかわり学習開発部会）がそれぞれのプロジェクトで担う子どもたちにつけたい力を設定している。それぞれのプロジェクトで設定している子どもたちにつけたい力、いわゆるカリキュラムの目標は図2の通りである。

なお、三原学園全体を通しては次のようなことにカリキュラムの特徴がある。

- 本学園は国際的コミュニケーション能力の育成を中心としており、これは全ての教育活動を通して育てようとしている。

また、本学園はこれまでも幼小中一貫して「人と人のかかわりを深める」ことをテーマに掲げて研究を進めてきているので、人とかかわり、いわゆる人間関係力の育成も全ての授業・保育を通して育てようとしている。

- 先に述べたように、国際的コミュニケーション能力・人間関係力の育成は通教科で行われるものであるが、国際的コミュニケーション能力は特に国際交流学習開発部会・マルチメディア部会で、人間関係力は特にかかわり学習開発部会でその育成そのものを目的としながらカリキュラムを作成している。
- 21世紀型教科学力は、いわゆる「不易となる学力」を土台としながらも、「21世紀に対応する学力」を各教科で追究しながら育てようとしている。



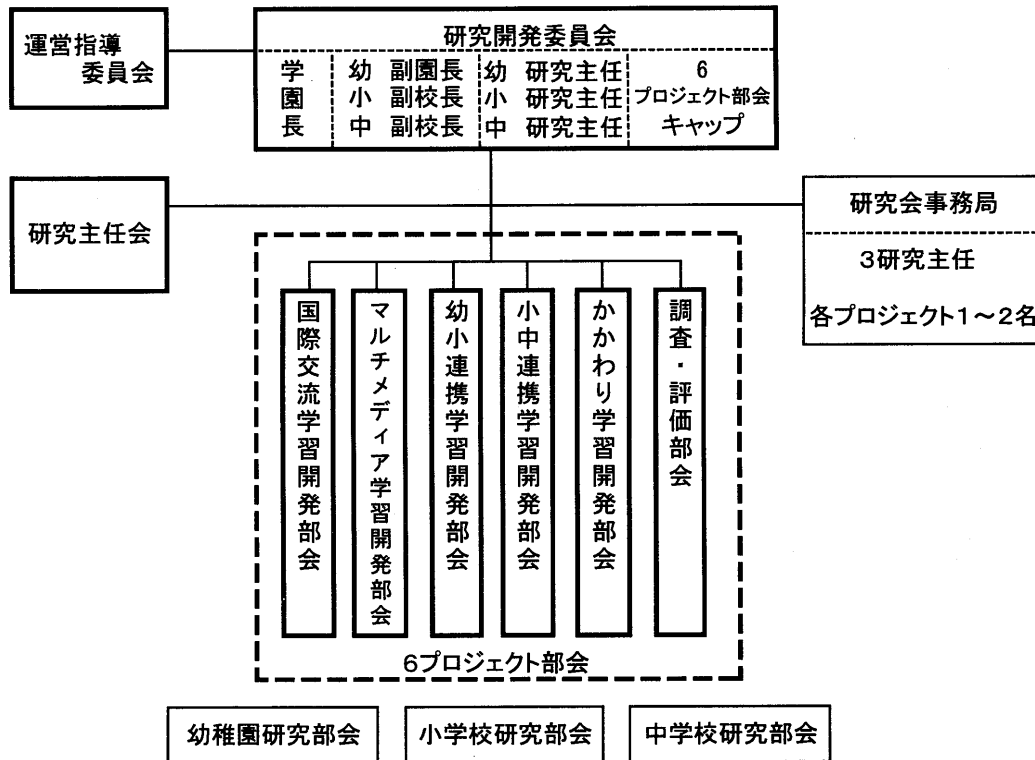
		国際的コミュニケーション能力	21世紀型教科学力	人間関係力
国際コミュニケーション	国際交流 マルチメディア	確かな語学力を基に、様々なメディアを駆使して多文化を理解したり、人々の国際的コミュニケーションを促す力		
保育・教科学習	国語		<ul style="list-style-type: none"> ○言語認識力, 言語技術 ○メディアとコミュニケーションに関わる力 	
	社会		<ul style="list-style-type: none"> 国際的な資質をもつために ○事実をしっかりととらえる力 <ul style="list-style-type: none"> ・観察力 ○多面的・多角的に社会的事象をとらえる力 <ul style="list-style-type: none"> ・批判力 推理力 ○自主的・理論的に思考判断する力 <ul style="list-style-type: none"> ・観察力 批判力 推理力を総合的に用いる力 ○合理的意志決定の能力 ○問題構成力(問題解決力に加えて) 	
	算数・数学		<ul style="list-style-type: none"> ○技能と考え方が個人の中で統合され、様々な場面でそれらを活用できる力 	
	理科		<ul style="list-style-type: none"> ○自然事象にかかわる中で、問題を発見・構成し、科学的な思考によって解決していく力 ○日常生活において生起する様々な問題を、科学的・論理的な思考によって解決していく力 	
	英語		<ul style="list-style-type: none"> ○言語活用能力 ○言語運用力 ○実践的な場面で生きて働くコミュニケーション力 	
	音楽		<ul style="list-style-type: none"> ○共感的表現力 <ul style="list-style-type: none"> ・感じる力 ・イメージする力 ・コミュニケーション力 ・創造力 ・表現力 	
	図工・美術		<ul style="list-style-type: none"> ○日本美術の受容と発信の力 ○多様な美術の受容と発信の力 ○生活に取り込む実践力 	
	技術科		<ul style="list-style-type: none"> ○実践的・体験的な学習活動を通して、ものづくりやエネルギー利用及びコンピュータ活用等に関する基礎的な知識と技術 ○技術が果たす役割について理解を深め、それらを適切に活用する能力 	
	家庭科		<ul style="list-style-type: none"> ○自立(自律)と共生の視点をそなえた生活実践力 ○国際化・情報化・環境問題・消費者問題・少子高齢化・男女共同参画などの社会・生活状況に対応することができる力 	
	体育科		<ul style="list-style-type: none"> ○自らの意見を持ち、運動を通して積極的に意見交流を行うなど、周りの人々と主体的にかかわり合いながら、活力のある生活をおくろうとする能力 ○生涯を通じて、行うことを通しても、観ることを通してもスポーツを楽しむことのできる豊かなスポーツライフをおくることのできる能力 	
	幼小(表現科)		<ul style="list-style-type: none"> ○感じる力 ○イメージする力 ○自分の思いを表す力 ○相手の思いを受け止める力 双方向にあらわす力 	
	幼小(発見科)		<ul style="list-style-type: none"> ○身近な自然や地域社会への愛着 ○認識の基礎 <ul style="list-style-type: none"> ・事象の特性や関係の理解につながる体験をもとにした、思考力や表現力 ○実践力 <ul style="list-style-type: none"> ・自らの問題の解決や目的の実現に向けて、子どもたちが主体的に活動を進めていく力 	
かかわり学習	(道徳・特別活動・クラブ・学校行事)			広い視野に立ち、より直接的・体験的に他者や集団と豊かにかかわり合う力

図2 カリキュラムの目標構造

5

研究組織

(1) 研究組織の概要



この組織の中で、太枠で示した部分が学園研究に関わる組織の中心である。幼稚園・小学校・中学校の各部会は、各校園独自の研究計画などに基づいて独自性を生かした研修を行うためのものである。また、研究会事務局は、学園研究の推進とは別に、各年度の研究会を運営するための事務的な仕事内容を担うものである。

(2) 6つのプロジェクトによる学習開発

本学園の研究推進に当たっては、研究を中心となって推進していく組織として6つのプロジェクト部会を設け、それぞれのプロジェクト部会が独自の研究を推進することができるようにしている。各プロジェクト部会は、全て広島大学教官との共同プロジェクトによる研究体制をとり、一つの学園の中で6つのプロジェクト研究を同時に行われている。この6つのプロジェクト部会に、本学園の幼・小・中の教職員が分かれて所属している。

○国際交流学習開発部会及びマルチメディア学習開発部会

これらの部会は、国際的コミュニケーション能力の育成をめざす学習開発を行う。具体的には、国際交流学習を通して多文化理解やコミュニケーションスキルの向上を図るとともに、マルチメディア学習を通して情報活用能力・情報の科学的理解及び多角的判断能力・メディア社会に参画する能力及び態度などを育むための、幼小中一貫教育カリキュラムの作成と学習指導のあり方の研究開発を行う。

○幼小連携学習開発部会及び小中連携学習開発部会

この2つの部会で主に育もうとしている21世紀型学力は21世紀型教科学力であり、その具体的な学力の設定及びそれらの力の定着に向けての学習方法のあり方の研究を行う。幼小連携学習開発部会では、幼稚園～小学校第3学年までの体験を重視した学級担任制による保育・教科のあり方について、小中連携学習開発部会では小学校第4学年～中学校第3学年までの教科担任制による教科学習のあり方について、それぞれ幼小・小中が一貫したカリキュラムの作成と保育・学習指導のあり方の研究開発を行う。

○かかわり学習開発部会

この部会は、人と人とのかかわりを生み出すことができる人間関係力の育成をめざす学習開発を行う。具体的には、道徳・特別活動の総合単元開発や、異校種・異学年交流活動を取り入れることを通しての感動体験を重視した学習の実践や幼小中一貫の学校行事のカリキュラム及び指導のあり方についての研究開発を行う。

○調査・評価部会

この部会は、研究全体の評価計画を作成するとともに、運営指導委員会の外部評価と連携した研究の評価、子どもたちの実態調査、研究に対する意欲向上の取り組みなどを行い、研究の推進に寄与するものである。

(3) 研究開発委員会

研究開発委員会は、学園長・幼小中副校長・幼小中三研究主任・各6プロジェクト部会のキャップから構成され、本学園の研究推進の中心的な役割を担う委員会である。この委員会は、月1回の定例委員会を持ち、各学習開発部会の研究内容の交流や、事務的内容の諸連絡、研究運営に関する事項の決議を行う。

(4) 運営指導委員会

運営指導委員会は、広島大学及び他大学の先生方、県・地区・市それぞれの教育関係者の方々と構成されている。

この委員会の役割は、次の通りである。

- ①国際的コミュニケーション能力の育成を中心とした21世紀型学校カリキュラムの研究開発に関する情報を提供するとともに、研究開発学校の実態を把握し、研究推進に関わる指導・助言を行う。
- ②研究開発学校が取り組む実践的な研究について、専門的な分野で具体的な指導を行う。
- ③研究開発学校の研究の進捗状況に基づき、次年度以降の研究開発に向けてのアセスメントを行う。

6

研究計画の概要

この開発研究は3年間計画で行い、大きくは次のような研究計画で進めている。

第1年次	○研究の組織作り ○各プロジェクト部会による研究構想案作成・理論構築 ○各プロジェクト部会の研究構想案に基づく単元開発の試み ○平成15年度幼小中一貫教育公開研究会の開催 ○第1年次の研究内容のまとめと評価 ○第2年次の研究計画書及び教育課程の編成
第2年次	○各プロジェクト部会による幼小中一貫教育カリキュラムの作成 ○各プロジェクト部会による評価規準作り ○平成16年度幼小中一貫教育公開研究会の開催 ○第2年次の研究内容のまとめと評価 ○第3年次の研究計画書及び教育課程の編成
第3年次	○各プロジェクト部会による幼小中一貫教育カリキュラムの修正 ○各プロジェクト部会による評価規準の修正 ○平成17年度幼小中一貫教育公開研究会の開催 ○各プロジェクト部会の3年間の研究内容のまとめと評価 ○第3年間の研究内容全体のまとめと評価